
幻の神々

ミイティ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻の神々

【Nコード】

N0701N

【作者名】

ミイティ

【あらすじ】

第二作目の小説です！。

うまくかけてるかわかりませんが見てやってください

砂の村サンドヴィレッジ

中央都市リエステール。そこは中央都市の名に恥じず、その大きさは南側の街の中では最大規模と言えよう。

武器屋、道具屋、能力（魔法を示す）の店に酒場、大規模な屋敷もあり、

聖アルティア教会^{カテドラル}聖堂、住居区など。

そこには、箒やボードで空を飛び交う者たちが多く居た。

また、自警団^{ナイト}も数多く駐屯し、平和な街である。

そんな中、魔物の討伐依頼を頼まれたあるギルドに所属する者達が旅立つ準備をしていた

「燃烧薬と石化薬、それとスライム破裂薬をください」

ある店の前で、弓と矢筒を肩にかけてある少女が買い物していた。

「まったく、やっと旅立てるのか。雑魚相手にそんな準備することあねえだろうにょ」

後ろからひょこつと現れた、腰に剣を差してある男がいった。

「射手は矢がいるから必然的に依頼前は買い物が必要なの！」^{スナイパー}

少女は、会計を済ましながら後ろの男に反論をいった。

「ふん」

男は関心なさげに他の店を見ながら返答を返した。

視線の先には、黄の髪に赤い瞳、ゴスロリの服の美人が居た。

「まったく、これだから男は……」

男を白眼で睨みながらぼそつと呟いた。

「ほら、いくよ！」

男の服をつかみ、道に沿ってズンズンと歩いていった。

「離せよ！ 自分で歩くからよ！」

男がそう言つと、少女はその手を離れた。

「歩いていくと時間かかるし飛ぶ？」

「ああ。そのほうがずっと楽だろ」

少女は男の承諾を得ると、右手首に装着してあるブレスレットの寶石部分を地面に向けた。

それに続くように、男もだ。

「エアロボード！」「エアロブルーム！」

二人は名称が違う言葉を言つと、ブレスレットからは光が放たれ、どこからともなくボードと^{ほうき}箒が現れた。

二人はそれぞれ自分の飛行道具をつかんだ。男はボードを。少女は^{ほうき}箒を。

そして二人はそれに乗ると、上空へものすごいスピードで飛び立った。

元居た場所には砂埃が舞い、そこにいた人達は目を押さえながら^{せき}咳をしていた。

”ビュン”

「おい！ 何でお前の箒はそんなにえんだよ！」

「へっへっん、あんたのボードと違って安物じゃなへブツ！」

「ざまあみろ！ 俺はお前と違って安物の箒じゃねえから、小回りが利くんだよ」

男は、樹に激突した少女に向かって言った。

「なんですってえ！」

後ろから追いついた箒乗りの少女は、弓を構えていた。

「お、おい！ 落ちつけえ！」

必死に男は止めたが、時は遅く、数本の矢が放たれていた。

「なんでよけるのよ！」

少女は、頬を膨らませて言った。

「はん、ボードは小回りが利くんだよ！」

「きい〜！」

少女は、猿のような奇声を上げて男を抜き、どんどん先に行った。

「あつ、おい！」

男は必死においつこうとしたが、箒の速度にはおいつけず……。
「やっとなまったか！」

ある村の上で、少女は止まっていた。

「遅い遅い！　ここだよここ！」

すっかり機嫌を直し、いつも通り元気に振舞っていた。

二人は迷惑をかけないようゆっくりと地上に降りた。

「ここか、砂の村『サンドヴィレッジ』は」

二人はそれぞれの飛行道具に指輪を向け、

光が発せられると飛行道具は吸い込まれるように消えていった。

「さて、どうす　」

「よくぞいらしてくれました」

男の声を遮り、後ろから老いたおじさんが話しかけてきた。

「ここの長老ですぞ。そんな警戒しなくてもよろしい」

長老が言ったとおり、二人は弓と刀に手を当てていた。

二人は、安心したようで手を離れたが、多少警戒している。

「詠唱発動準備なぞせんでよいぞ。そこまで疑われていると、笑う

しかないの。ホオッホオッホオッ」

「……よく分かったねおじさん！」

「ところで、君たちの名前はなんというのじゃ？」

おじさんは二人の目を数秒ずつみて聞いた。

「あつ、あたしの名前はヴェロニカ・ビリアツィ。通称ベリー！」

「俺はクロード・ディア・プレスコット。通称いるのか？　通称はクロ
ウだ」

二人は普通どおり名乗ったが、長老は目を大きくして固まっていた。

「き…君たちは……あのギルドの……？」

「うん、あたしたち—Panttheon of phantom《
幻の神々》に所属してるの」

「ああ、俺たち—Panttheon of phantom《幻の
神々》に所属している」

二人の声がもった。

「おお……それなら安心して頼めるわい」

長老は、自慢の髭を撫でながら言った。

「気をつけていつてくるんじゃないぞ」

「もちろん!」「ああ」

そう言って二人は踵^{きびす}を返して反対方向へと歩き出した。

砂所場所

「ふ〜ん、町から近いってのにモンスターがうじゃうじゃいるね」

「う〜ん、このままだと町を襲うかもなあ……」

「じゃ、狩る狩る！」

「いや、ペットの可能性が」

”ズシュッ”

二人が雑談をしていると、突如『何か』を引き裂く音がした。

「痛っ」

『何か』とは、クロウの服や皮膚だった。

”ヒュン”

クロウの背後から放たれた矢は、クロウを襲ったモンスターの頭を貫いた。

「こんなミイラ男、『グロリム』にやられるなんて不覚だな」

「ほら、そんな呟いてる暇があったらグロリムの大群から離れなよ！」

ベリーは、クロウに注意を促した。それに呼応するようにクロウはグロリムの大群から離れた。

「こんな臭えやつがペットなわけねえか！ 依頼にはねえが潰しとくぞー！」

そう、グロリムは臭いのだ。死体が動いているのと同じようなので、腐臭がする。

グロリムの単体ならともかく、大群はきつい。これはグロリムだけではなく、他のモンスター全ても同じだ。

残念ながら、クロウ達の前にはグロリムの大群が……。

「めんどくせえが嘆いてても仕方ねえかつ！」

そう言っただけクロウは腰の刀へと手を当て、横から迫ってくるグロリムに対し、抜刀で腹を切り裂いた。

「援護するからつつこみな！」

「ああ！」

ベリーの言葉に返答すると、グロリムの大群へと橋って言った。

「はあああ！」

闘志を燃やして突っ込み、無茶苦茶な刀技でどんどん真ん中へと向かっていった。

「おっと！」

向こうもただやられるわけではなく、グロリムが攻撃をしてくるところをベリーが矢で射る。

「くそっ、どんだけいるんだよ！」

二人がどんどんグロリムをなぎ倒してるにもかかわらず、まったく減る気配がない。

その時だった。

「ファイアボール！」

魔法名が誰かの口から発せられると、突如グロリムの大群の中から複数の火柱が巻き上がった。

「だ、誰だよ危ねえなあ！」

グロリムの苦痛の叫びにまじり、クロウはそう呟いていた。

「随分と苦戦してるようね」

クロウの目の前には、突如女が現れた。

「マママスター！？」「ギルドマスター！？」

いつのまにか火柱によってできた隙間をぐりぬけてきたベリーがいた。

「マスター、何故ここに？」

「マスターなんてよしなさいよ。いつも通りでいいわよ？　っと、そんなことより先にグロリムを掃除するわよ」

そう言っただけで突如現れた女は、いきなり消えたと思いきや、空中にいた。『テレポート』だ。

そして空中浮遊の魔術、『レビテーション』で浮いていた。

「どいておかんと巻き添えを食うぞ？」

女はそう注意を促すと、クロウとベリーは慌ててグロリムの大群か

ら飛び出した。

「すべての力の源よ 輝き燃える紅き炎よ 盟約の言葉によりて
我が手に集いて力となれ！ プラストボム！」

女の上にはファイアボールを遙かに上回る大きさの火球がいくつも
現れ、

着弾すると同時に耳の鼓膜が破れるかと思うくらいの爆音を発した。
魔法によって起きた土埃など視界を遮るものが消えると、火球が着
弾した地面は溶岩のように赤く煮沸していた。

そこにはグロリムの骨さえも残っていなかった。

「で、マスターは何故ここに？」

クロウは、目の前にレポートしてきた女に問いかけた。

「マスターなんて呼ばなくて、いつも通りにエミイでいいわよ」

「じゃあエミイ、なんでここにいるんだ？」

「私が受けていた依頼が終わって、エアロブルームで帰っていたら
あんた達が居たということよ」

「じゃあさ、エミイもあたしたちの依頼手伝ってよ！」

「何の依頼か知らないけど、良いわよ」

「ありがとー！」「助かるぜ」

そんな雑談を交わしているうちに、目的地へとついた。

「俺実はここ来たことがあるん」

「あたしここ初めてきたー！！」

クロウの発言は、ベリーの発言によって掻き消された。

三人は古墳の形をした『砂上墓所^{さじょうぼしょ}』の中へ入ろうとしたが……。

「おい！ 現在は無断な進入は禁止されている！ 長老に許可をも
らってから」

一人の槍をもった門番の言葉を、もう一人の門番が掻き消した。

「あつ、あ、あ、あなたは…エミリア・エルクリオ……さん！？」

「ああ、そうですけど……？」

門番がいった『エミリア・エルクリオ』とは、『エミイ』のことである。

門番の二人は耳打ちをしはじめた。

終わったと思えば、二人は微笑みながら快く通してくれた。

「なんだったんだ？」

ベリーは歩きながら後ろを振り向いて門番を見て言った。

「おいベリー、既に砂上墓所に入ってるんだぞ？ そんな悠長に構えてたら、一瞬に餌になるぞ」

「大丈夫だよ。だってエミイがいるんだしさ」

「ほら、雑談してるうちに地獄からの誘いがきたわよ？」

エミイの言葉に即座に耳を傾けたクロウは、相手の数を確認した。

「グロリムが数十体、スライムが数十体の大群か」

クロウは、モンスターの種類と数を的確に言った。

「さすが、瞬間記憶能力は伊達じゃないね！」

ベリーはそういいながらクロウの肩を叩いた。

モンスターなど目に入っていないようだ。

「言っておくけど、私はあんまり加勢できないよ？ あまり強い魔法を使ったら古墳が崩れるからさ」

「ええー！？」「ええー！？」

「いや、でも初步魔法程度でなら援護できるからさ、突っ込んで良いやー！」

エミイの声に呼応して、クロウは突っ込んでいった。

「うおおおお！」

「あんまり強力な技は使うでないぞー」

今にも古墳を崩壊させそうなクロウに、エミイは注意を促した。

”ヒュン”

エミイとクロウの頬を数本の矢が遮り、見事、スライムとグロリムを貫いた。

「ああ、もう！ めんどくさい！」

そう言つて、ベリーはモンスターの大量へと突っ込んでいった。

普通の弓を扱う職業のやつらは、モンスターの大量に突っ込んでいくのは自殺行為だ。

だが、ベリーは違う。

弓の両端、つまり下関板しもせきいたと上関板うわせきいたの部分に、刃がついているのだ。弓を回転させ、チャクラムのように扱ってどんどん切り裂いていく。威力は低いが、機動性に優れている。スライムなどの雑魚相手などには、とても有効だ。

二人が大群に入っていくのを見終わると、エミイは地面に自慢の杖、『サンタマリア』をモンスターの大量群にむけて詠唱を開始した。

「氷結せし刃、鋭く空を駆け抜ける！ ダストチップ！」

杖の先端から少し離れたところに魔方阵が展開され、魔方阵からは氷で造形された鋭利な小さい針が大量に放たれた。

放たれた氷の針は、全てモンスターの目に直撃した。

「今のうちに！」

「おう！」「うん！」

針がささって目が見えなくなったモンスターたちは、持っている武器を投げ捨てて目を押さえている。

目に針がささったモンスターだけを、ベリーとクロウは次々と倒していった。

「空と大地を渡りしものよ 優しき流れ 漂う水よ 我が手に集いて力となれ！ フリーズ・アロー！」

詠唱と魔法名を言い終わると、エミイの後ろには大量の氷の矢が現れた。

そして氷の矢は、モンスター達の様々な場所を貫いた。

「めんどくせえ！ 一気にけりつける！」

エミイの方を一瞬だけ振り向いてそう言った。

「ベリー！ 今だけ俺のまわりを頼む！」

そう言つてクロウは、刀を地面に突き立てて目を閉じた。

「……………天剣招雷てんけんしょうらい！」

沈黙したクロウの口から放たれた言葉によって、刀はチリチリという音を立てている。電流が流れているのだ。

「陰いんの流れ 五の太刀・閃光雷撃砲せんこうらいげきほう！」

再び口から発せられた言葉により、刀身に纏わりついていた電流は、激しく音を立てて拡散し、前方の敵を燃やした。

「陰の流れ 七の太刀 無風^{むふう}！」

クロウはそう言うと、刀を鞘にしまった。

”ズシュッ”

突然、全てのモンスターのあらゆる部位が断たれた。

「さっすがあクロウ！ おかげでメンタルを使わないですんだよ！」
ベリーが口にしたメンタルとは、MP、つまり魔力のことである。

「おかげさまで俺は体力が随分減ったぜ。エミイ、回復を頼む」
クロウがそう言うと、エミイが目の前にレポートしてきた。

「聖魔法や光魔法はあんまり得意ではないんだけど……」

「大丈夫だよエミイなら！」

ベリーから応援を受けたエミイは微笑んでから、目をゆつくりと閉じて詠唱を開始した。

「聖なる癒しの御手よ 母なる大地の息吹よ 願わくば我が前に横たわりしこのものを

その大いなる慈悲にて救い給え……………リザレクシヨ
ン！」

エミイの杖、サンタマリアからは魔方陣が展開され、魔方陣から光の蔓のようなものが現れ、

ゆつくりとクロウを包み込んでいった。

「体力が回復してるのが分かるな」

うなぎ

「これでどんな敵がきても大丈夫だ」

体力が回復したクロウは立ち上がった。

”ミシミシミシ”

何かが音を立てると同時に、足元が膨れ上がった。

「な……なんだ!？」

「離れて!」

エミイが慌てて二人に退くように言うと、二人は即座に反応して退き、今もなお膨れ続けている地面を黙視していた。

”ドッ”

地面の膨れ上がりは、弾けて当たりには地面の破片が飛びかった。

「吹き過ぐ風よ 精霊達よ 我が手に集いて力となれ! ウインドブリット!」

杖の先端からは何かが放たれると同時に、こちらに向かってきた破片が崩れた。『衝撃波』だ。

ひと段落ついた三人は、地面が膨れ上がったところを黙視した。

「白い……うなぎ……?」

沈黙を破って第一声を発したのは、ベリーだった。

「これが依頼にあったエル・ドラグーンか……?」

「敵の名前なんかどうでもいい!」

ベリーはそう言って矢を構え、エル目掛けて矢を放った。

”ヌルッ”

放たれた矢はエルに当たったが、何故か矢は刺さらなかった。

「そんな!？」 「なにっ!？」

『エル・ドラグーン…… 鱗は無く、全身がぬるぬるした粘液で覆われている手足や翼の無いウナギのような竜。エルの体に纏わりついているヌルヌルする液体は、矢や刃などの鋭利な攻撃を無効化する

……』

ベリーとクロウがパニックになって焦っている中、エミイだけは冷静に相手のモンスターの把握をしていた。

『粘液の下の皮膚の色は砂上墓所などの涼しい場所では青白い色になり、昼の暑い砂漠では赤色に変わるという不思議な性質を持ち死ぬと真っ白になる。この竜が放つブレスも皮膚と同じ様に場所によって変わり、涼しい場所では冷気を帯びた光線を、暑い砂漠では焼くような熱線を放つ。だとしたらここでは冷気を帯びた光線を扱う……』

エミイの把握を聞いていたかのように先ほどまでじっとしていたエルが、把握が終わると同時にエミイ目掛けて流れるように滑走してきた。

「俺たちを無視してエミイを狙うなんて、100年はえーよ!!」
喋りながらエミイの前方に出たクロウは、刀を構えて攻撃を防ごうとしていた。

エルはクロウの目の前までくると、鋭い牙で食らいつこうとしたが、体の内部には当然ぬるぬるはなく、牙はなんなく防げた。

”ヒュオオオオ”

「な、なんだ？ 急に寒くなってきたぞ……？」

「冷気を帯びた光線、ネイチャーブレスを放つ気だ！ 離れて！」

即座に気づいたエミイが注意を促したが、クロウの頭では理解できていない様子……。

「我が前に立ちふさがる愚かなる者に、我が内面の世界で無限の地獄を見せん！ イリユージョン！」

エミイが魔法を発動したが、魔方陣は展開されず……。

「今のうちに離れて！」

二度目の注意で、クロウは反応して即座に飛びのいた。

「おい、何をしたんだ？ 突然動きが止まったが……」

「精神に直接働きかける魔術によって、今のあいつには幻の茨が絡みついたりのように見えて、それを本物と認識しとるのじゃ。今のうちに作戦を立てるのじゃ！ いくぞ！」

エルから三人は距離をとるために走った。

「先にいっておけ！ 幻術を突破されたときのことと考えて壁を作っておくから！」

命令を聞いた残りの二人は、そのまま走っていった。

「母なる大地よ 我が前に出で 万槍を弾く盾となれ！ アーシーウォール！」

エミイの少し前の足元には魔方阵が現れ、とたんに土が膨れ上がり、土の壁となった。

土壁の造形が終わると、二人においつくべくエミイは走った。

「体力的にはあやつらのほうが高いから、追いつけないわね……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0701n/>

幻の神々

2010年10月15日21時59分発行